

## 三重縣文語シンポジウムの報告

「古典の魅力 再発見」をテーマとする三重縣文語シンポジウム(NPO法人文語の苑及び三重縣共催)は、令和三年十一月二十七日(土曜日)午後一時半より三時半まで、三重縣總合文化センターにて開催せられたる處、成功裏に之を了せり。  
その概要下記の通り。

先づ文語の苑理事長土屋博登壇し、開會の挨拶並びに「文語のすすめ」と題し美しく格調高き文語を後の世代に繼承して行くべき必要性について述べるとともに、明治二十年代の三重縣に於ける高等小學校生の文語作文能力の極めて高かりしことを雑誌「小國民文林」の實例に基づき紹介し、文語を學ぶことは先人と繋がる合鍵を獲得する如きことと説く。

續いて中島八十一氏(文語の苑監事)より「文語で書くことの楽しみ」について講演す。自ら書いてみるに、文語のもつリズム感には人知れず満足するものありて、文語文を読むことも次第に厭はなくなり、それまで觸れようともせざりし本をふと手に取らば、急速に何百年も遡る心地ぞすると。

次に高田友氏(文語の苑主任研究員)より「文部省唱歌」についての講演あり。文語は口語よりも美しく、少なくとも詩の言葉として優れてゐると斷言し、「ローライ」(ハイネ作詞の獨逸語の文語譯、なじかは知らねど心侘びて。)と「初戀」(島崎藤村作、まだ上げせめし前髪の)の歌詞の魅力を存分に紹介す。

次に三重縣側話者に移り、田中康二氏(皇學館大學教

授)より「本居宣長『もののはれを知る』説の現代的意味」についての講演あり。男性が女性のみめかたちの美しさに心を奪はれてこの人と添ひ遂げたしと思ひ、女性も男性の熱烈なる思ひに負けて好きになるといふ「もののはれを知る」説には、感情・情動の側面のみならず知的なる側面もありとし、近代自由戀愛の先駆けとす。

最後に三重縣在住の河原徳子氏(日本文學研究家)の朗讀「源氏物語の名場面を読む」あり。「桐壺」(いづれの御時にか)、「夕顔」(宵過ぐるほど少し寝入り給へるに)、「若紫」(何事ぞや童女と腹立ち給へるかとて尼君の見上げたるに)、「夢浮橋」(所につけてをかしき響應などしたれど)、など。

本シンポジウム、コロナ感染の時期に企畫したることもあり、一時期は開催自身も危ぶまれたところ、何

とか實現に漕ぎ着けたるは、洵に感慨無量といふほかなし。

この場を借りて、三重縣關係者(鈴木英敬前知事、文化振興課小林班長、擔當の小川様)に深甚の感謝を述べらる次第。

(土屋博記)